

中学生の保育体験実施における中学校と保育所の意識について

七木田 敦

The Awareness to the Day Care Youth Experience Program in junior high school and child care.

Atsushi Nanakida

This report describes the of the width of the awareness gap between the child care and junior high school about goals and concepts underlying the Day Care Youth Experience Program (DCYEP) This program was designed to provide young people of junior high school age with the chance to work with preschool children through field experience in day care centers, coupled with a seminar for the planning of early childhood learning activities and the introduction of child development concepts. It was felt that the students participating in this program would gain a number of benefits essential to the growing process largely withheld from the majority of adolescents in their normal school experience. These benefits include participation in the world of work, the exercise of responsibility, exposure to the knowledge and skills required to become parents, the personal rewards of the helping relationship, and a chance to grow in self-esteem and confidence through meaningful activity. The result of questionnaires about DCYEP of teachers in the child care and junior high school are revealed that the teachers of child care felt under the overload, however the teachers of junior high school were not. This report suggest DCYEP leave much to be improved for future efficient accomplishment.

1 研究目的

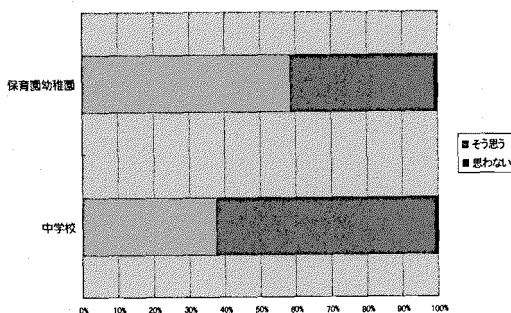
これまで思春期児童の保育体験は、高校段階で行われることが多く、また受け入れ園である幼稚園保育所はほとんど事前協議のないままに受け入れざるを得ない状況が少なくなかった。加えて、高校では家庭科の授業の一環として行事的、形式的に行われがちで、生徒、乳幼児、相互の発達に益するものであるかは疑問の余地があった。本研究は、高校で取り組まれている「保育体験」より早期の中学生から体系的に体験できるプログラムを作成することを目的とする。またその際、従来の学校主導ではなく、保育現場の側から、将来の親となる生徒に期待する育児意識や知識を提供するという保育者主導型のプログラムを立案し実施するということところが特徴である。これまで体験の場は幼稚園、保

育所が主であったが、近年地域の育児支援の重要となっている「子育て支援センター」もより育児に対する親近感や育児ストレスなどの問題と直面することができ、保育体験としても大変意義深いものと考え、保育体験の場として検討する。本研究では、事前指導に、幼児の日常や発達の様子、さらに遊びの意義、幼児の様子などをビデオ教材などを用いて新たな学習カリキュラムとして立案する。また事前／事後指導において乳幼児への関心や育児意識などのアンケートの結果を比較検討するなど、保育体験の体系的プログラムを図ることも目的とし、これまで、たんに子どもと触れ合うのみで終わっていた保育体験の意義と必要性を根本的に検討し直すものである。

そこで本研究ではその解決に向けた方策を、保育体験を将来の父親・母親となるための中学

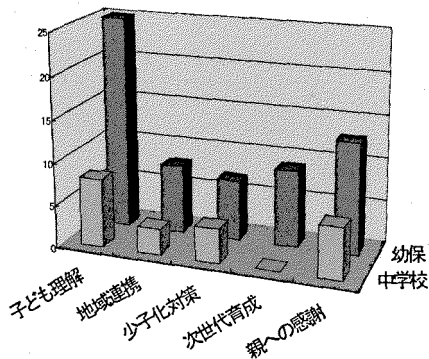
生の具体的な子育て支援の体験の場としてとらえ、次世代育成という観点から研究する。特に子育て中の親と関わりやその悩みや不安の解消に実績経験のある幼稚園、保育所、そして地域子育て支援センターが主体となり、(1)中学生に望まれる将来の父親・母親という観点、(2)乳幼児の発達促進という観点、において保育体験プログラムを立案し、保育所ならびに子育て支援センターにおいてそれを実施する。そして、本プログラムの評価を通して、中学生そして乳幼児の相互の保育体験の意義と効果について検討することを目的とする。本研究は3年計画の1年目であり、具体的な保育体験プログラムの実施の前に中学生の保育体験の実態について、幼稚園保育所との連携関係を明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。質問内容は、(1)保育体験の実施について、(2)連携の実際について、(3)中学校、保育所幼稚園相互に望まれること、そして(4)保育体験の意義についてである。これにより、よりスムーズな連携関係を形成するには何が必要で、またそれを妨げているものは何なのかを明らかにする。

子育て支援に役に立つ

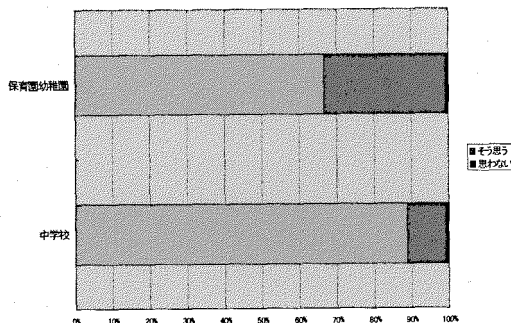


2 研究方法

「保育体験」の意義は



中学校教師の保育参観が必要



2-1 研究の計画

(1) 保育体験の調査

中学生の保育体験の実態について詳細に分析し、幼稚園保育所との連携関係を明らかにするために、東広島市内の全中学校10校と幼稚園保育所(40カ所)を対象に乳幼児とのふれ合い体験、保育体験の実施に関するアンケート調査を実施した。質問内容は、(1)保育体験の実施について、(2)連携の実際について、(3)中学校、保育所幼稚園相互に望まれること、そして(4)保育体験の意義について、を中心に全34項目である。アンケート調査の回収率は中学校100%、保育所幼稚園75%であった。

3 研究成果及び考察

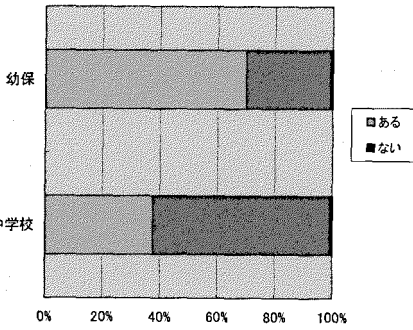
(1) 保育体験の実施について

中学校では全校が、また保育所幼稚園では88%が保育体験を実施していた。未実施の保育所幼稚園では「連携の要請がないから」という回答であった。また中学校では、保育体験を平均2.875時間実施しているとする一方で、保育所幼稚園では平均6.54時間実施していると答えていた。また実施時間の長さについて、中学校では70%がもっと長くと考えている一方で、保育所幼稚園は82.7%が十分と考えており、保育所幼稚園にとって負担が大きいものとなっていることが想定された。

また中学生段階からの保育体験の必要性については、中学校で100%、保育所幼稚園で93.1%であった。保育体験が、「子育て支援」「次世代育成」において資するものという認識は、中学校で37.5%と低く、一方保育所幼稚園では62.9%と高かった。

いわゆる「赤ちゃん体験」の必要性について、保育所幼稚園では77%が「必要」としている一方で、中学校では50%にとどまった。以上のことより、中学校では保育体験の教育的な意義は

見ていて「ハラハラ」するときがある



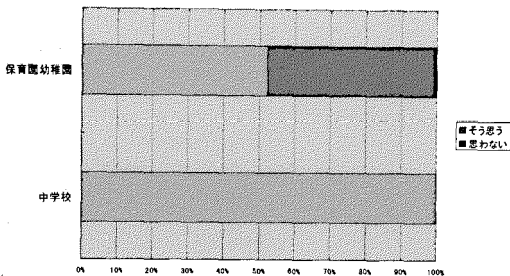
認めてさらに増やしたいと考えているものの、「子育て支援」「次世代育成」についての認識は低かった。

また保育所幼稚園では、従来の「保育体験」では保育者の負担感が大きいということが示唆された。

(2) 連携の実際について

「保育体験」の事前協議について、その必要性は中学校、保育所幼稚園とも認めていたが、「事後協議」については中学校で60%、保育所幼稚園で15%程度しか認めていなかった。「体験がそれぞれ中学生、幼児によいものとなっているか」という問いに対しては、中学校で100%、保育所幼稚園で11%であるが、「そうはなっていない」と考える保育者がいた。事前の中学校教員の保育参観の必要性について聞いたところ、中学校では100%が機会があれば「そうしたい」と答えていたが、保育所幼稚園では32%の保育者が「必要はない」と答えていた。同様に、事前の中学生の参観について、必要性を聞いたところ中学校では87.5%が「必要」としていたが、保育所幼稚園では29.1%にとどまった。体験後の学習評価について、全中学校がその必要性を認め、実施していたが、保育所幼稚園でその必要性を感じていたのは31.8%であった。「事前協議」では簡単な日程調整などが

事後の学習評価が必要



主で、教育目標や中学生や幼児などの教育達成に関するものではなかった(自由記述より)。

また多くの保育所幼稚園で「保育体験」を教育課程の中にとらえ、計画的に評価するという観点は少なかつた。これは両者の教育評価に対する考え方の違いによるものと考えられる。

(3) 中学校、保育所幼稚園相互に望まれること

保育体験中、中学生の対応に「みていてハラハラするときがある」とする中学校教員は37.5%と少ない一方で、保育所幼稚園保育者は64.2%もがそう感じていた。また「何かと気がつかうことが多い」とする中学校は62.5%で、保育所幼稚園では62.9%もがそう感じていて、保育体験の相互の意識に違いがあることがわかった。

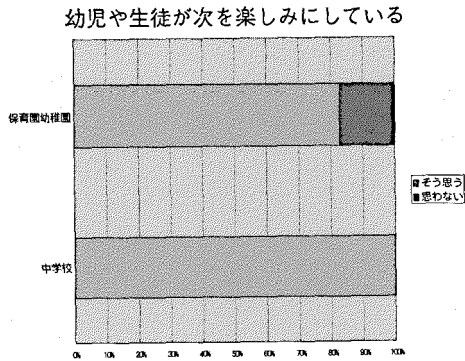
自由記述において「保育者が適切な言葉がけをしてあげることで、気持ちよく取り組めることが多い」とする保育所幼稚園が少なくなかつた。保育体験を中学生が楽しみにしていると回答した中学校は100%で、保育所幼稚園では92.3%であった。また自由記述において中学校では、「保育体験の時間を増やしたいが、カリキュラムの編成上限界がある」との意見が多数あつた。この点については先行研究でも述べられており、本研究実施上の今後の課題となる。

(4) 保育体験の意義について

保育体験についてその意義を、「将来親となるために必要だ」とする中学校は75%であるのに対し、保育所幼稚園では100%がそう思っていた。

中学校では、保育体験の意義を認め、教育課程の中に組み入れることを積極的に行っているということが確かめられたが、一方で幼稚園保育所の側では中学生が訪問することへの負担感があるということが示された。これは保育体験の多くが中学校の主導でなされており、幼稚園保育所はいわば中学生の体験の「場」としてでしか、とらえられていないという保育者側の失望もあるのではないかと考えられる。また自由記述において保育者側から「中学生がどのように学習するのかわからない」「今の中学生がわからない」などといった意見も少なくなく、相互の有意義な体験を計画するには、保育者の中学生理解という側面も必要であることが示唆さ

れた。



4. おわりに

当初の計画では、全国7カ所においてそれぞれ中学校、保育所幼稚園の「保育体験」の実施について調査する予定であったが、次年度の本研究に資するためには、中学校、保育所幼稚園の連携の対応関係のある特定の地域で実施した方がよいと考え、研究対象を東広島市内、中学校、保育所幼稚園とした。調査の結果、地域の実情を反映した情報を得ることができて、次年度の「保育体験」プログラムの策定と実施において有益なものとなった。

これまで地域の実情を反映した中学校と保育所幼稚園に関する連携について、本研究でなされたようなアンケート調査はほとんどなかった。この意味において、次年度のプログラム策定に資するという研究上の意義の他に、次世代育成をめざした子育て支援プログラムとして中学生の「保育体験」を実施する上での必要な要因と阻害する要因について明らかになったことは、今後「子育て支援」「次世代育成」を考える上で重要なことである。東広島市からも、この結果を「次世代育成対策基本計画」に盛り込み、異年齢交流を広げたいとの返答を得た。今後、本研究の結果をふまえ、次年度では中学校保育所幼稚園間の「保育体験」実施のための体制整備を図り、それをふまえてプログラムを策定し、実施するという計画を立てている。